

Weekly Report



名古屋アイリスロータリークラブ

例会日 水曜日 13:00～14:00

会長 藤谷 猛

例会場 ANA クラウンプラザ
グランコートホテル名古屋

幹事 深見 礼子

承認 2013年6月18日

公共イメージ
向上 岩崎 幸弘



ロータリー：
変化をもたらす

2017～2018年度名古屋アイリスRCのテーマ

共に活動し、共に奉仕し、
共に頑張るアイリス

●お問い合わせ：office@nagoya-iris-rc.jp

●公式WEBサイト：http://www.nagoya-iris-rc.jp

第202回 例会

2017年10月11日 13:00

- 司 会：長谷川芳子例会運営・司会委員
- 斉 唱：我等の生業
- 出席報告：出席者数 28名 / 会員数 42名
出席率 66.66%
前々回(200回) 修正出席率 92.7%
- ゲスト：
- ビジター：羽島 RC 岩田勝美 様

ニコボックス

○寒暖の差が本当に激しいですね。私は常に疲弊しているのので疲れます。ご自愛ください。(藤谷猛会長)

○今日は暑くなりました。週末から寒くなるようです。ご自愛ください。(安井戦略委員長)

会長挨拶

みなさん、こんにちは。私は、1か月ほど前に富山県の東部にある「黒部ダム」を訪れる機会がありました。先週、NHKの「ブラタモリ」で黒部ダムを特集していたので番組を見られた方もあるかと思います。本日は、その黒部ダムのお話をさせていただきます。

私は今回、初めて黒部ダムを訪れたのですが、そのスケール感に圧倒され驚くばかりでした。よくまあ、こんな所にこんな物を造ったなというのが率直な感想です。高さは186m、幅492m、貯水量2億トン(東京ドーム160杯分)、総工費は当時の費用で513億円、現在の貨幣価値では1兆円を超えともいわれています。作業員は延べ1,000万人、殉職者は171名と莫大な費用と多くの命を犠牲にして完成した建造物であります。

戦後、高度経済成長期を迎えると電力不足が発生し、関西地方では、昭和30年代、工場で週2日、一般家庭では週3日の使用制限が行なわれていたそうです。その事態を受け、関西電力の当時の社長太田垣士郎さんは1956年、黒部ダム建設事業を急遽立ちあげました。今後の電力供給には、大きなダムが欠かせない。われわれの前に黒部に勝る適地がないので

あれば、どうあっても“くろよん”の建設に着手しなければならない。そんな一途な想いが決断を支えていたようです。リスクが低下するのを待っているのでは、たとえ10年たっても動き出せないだろう。それでは電力安定供給の使命が果たせない。「存在するリスクをいかにして克服するかという点に、経営者としての手腕が掛かっているのではないだろうか」。当時の社長、太田垣士郎さんの述懐には、決断の重みがにじみでています。現在の様に電力が余っているのにダムを造るとか、建設業のために工事を起こすのではなく、当時は、社会が要請した本当になくはない工事だったのです。しかも電力不足は深刻で、あれだけのダム工事をたった7年間でやり抜くという資金的にも作業的にも無謀な挑戦でした。



「黒四ダム」建設は当初から厳しい難工事であることが予測されました。この地は日本の屋根といわれる北アルプスの山中です。3000m級の山並みが連なり、1年の半分は5mを超す雪に埋もれてしまい、気温はマイナス20度にもなるこの一帯は、厳しく人間を拒絶する秘境でもありました。

「黒四ダム」が建設される御前沢は急峻な渓谷でした。冬には積雪に阻まれるので工事資材や機材の大量輸送はまず不可能でした。そのため関西電力は、まずトンネルを開通させ工事用資材を運搬する計画を立てたのです。ダムを造る以前に運搬用のトンネルを作らなくては何も始まらなかったのです。これが大町トンネルです。しかしトンネル開通を待っているのは、工事が大幅に遅れてしまいます。そこで並行して人力による資材と機材運搬を開始。これが「黒四ダム」建設に向けた最初の取り組みでした。当時の鉄道立

山線の終点を拠点に、美女平を経て追分小屋というところまでトラックで運搬し、ここから人力により立山のノ越峠(標高 2700m)を超え、急斜面を下ってダムサイトの資機材集積所に至る約 25Km の道程です。険しい立山山中を抜ける、資機材大量輸送などおよそ考えられない難路でした。ボッカ(強力)と呼ばれる荷を背負って運ぶ人は現地の山の案内人を採用、最盛期には約 400 名ものボッカによって資材や機材が運び込まれました。なんと建設機械などは分解して人が運んでいたそうです。この時の歩行用の足場は幅 50 センチほどの崖だったこともありました。

そして昭和31(1956)年の8月、資材輸送路「大町ルート」工事に着工。「くろよん」建設での最大の難工事と言われる大町トンネルの掘削工事が、始まりました。昭和31年10月からはじまった掘削工事は、厳冬中も休まず続けられ順調に進みました。

ところが、昭和32年5月、入口から1,691メートルの地点で毎秒660リットルもの地下水と大量の土砂が噴き出しました。これは破碎帯と呼ばれる、岩盤の中で岩が細かく割れ、地下水を溜め込んだ軟弱な地層のことで、掘削作業は暗礁に乗り上げました。一日で20cmしか掘れない日もありました。しかし、現場作業員は、決して諦めませんでした。持てる全ての知識と知恵・経験を結集し、距離わずか80メートルの破碎帯に対し、7ヶ月の苦闘の末に突破したのです。この80メートルに多くの作業員が命を落とすことになりました。石原裕次郎と三船敏郎が主演した「黒部の太陽」は、この大町トンネルの工事を映画化したものです。この難所を乗り越え、昭和38年6月5日、「くろよん」は竣工の日を迎えました。7年の歳月と513億円の工費、延べ1千万人の人手、171名の尊い犠牲により完成したのです。

その後、関西への電力供給を始め、日本の経済成長を支えました。「くろよん」に命がけで挑み、難局を見事に乗り越えた使命感や情熱と、やり遂げる信念を持った当時の日本人には本当に頭が下がります。先人に支えられている私たちは感謝を忘れてはいけません。

私たちロータリーアンは、常々職業奉仕を謳っていますが、彼らこそ真の職業奉仕を実現した人々ではないでしょうか？文字通り仕事に命を懸けるといふ、その時代に思いを馳せることも必要だと感じさせられた一日でした。

会長挨拶を終わります。

■委員会報告



荒山財団委員長より報告がありました。

■幹事報告

深見礼子幹事より

本日の卓話をお願い致します。「岩田勝美さん」のご紹介をさせて頂きたいと思います。岩田さんは羽島ロータリークラブに在籍され、RI2630地区職業奉仕部門委員長を務めておられます。また、素晴らしいノウハウを持つ金属加工を中心とした株式会社岩田鉄工所を経営されておられますが、岩田さんは驚くほどのアイデアマンでもあり、新しい製品を続々と生み出されておられます。今日は、そのあたりのお話もお聞かせ頂けるのではないのでしょうか。岩田さん、本日は何卒宜しくお願い致します。

■卓話 岩田勝美様



岩田勝美様の卓話風景